

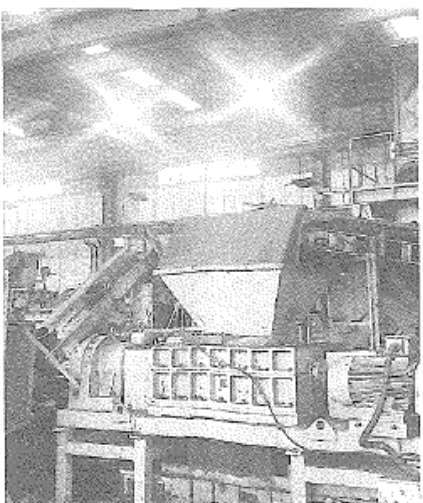
破碎機・切断機を新導入

タイヤチップの品質向上へ

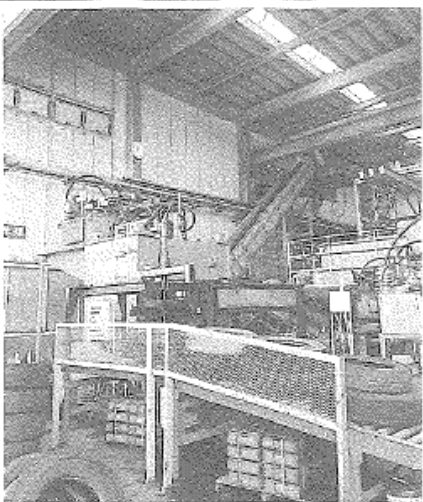
日量計70tの処理能力強化

神鋼産業

神鋼産業（神奈川県伊勢原市、清水孝一社長、☎0463・91・3663）はこのたび、TBタイヤやゴム加工品を処理する切断機を新たに導入し、PCタイヤ等を処理する破碎機を更新した。処理能力は合計で日量約70t増加。特に入れ替えた破碎機は利用先が望むこれまで以上に高い品質のタイヤチップを製造できる性能があるもので、より安定的かつ満足度の高い製品の搬出を可能にしている。



安定した廃タイヤ処理が可能な破碎機



新しく導入した切断機

今回の設備更新により、破碎機の処理能力は日量98・45t（変更前は日量58・4t）に増加した。また、新しく設置した切断機の処理能力は日量30t。工場全体では、破碎能力は日量401・25t、切断能力は日量183・24tに向上。処理能力合計は日量

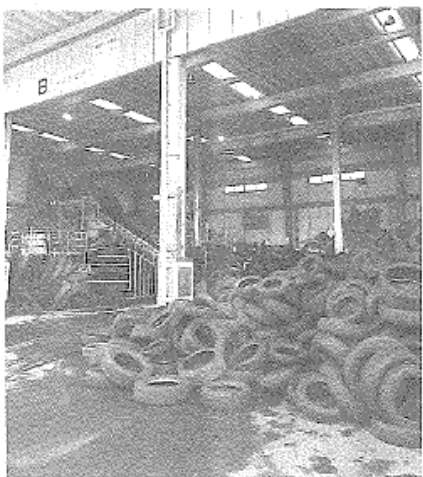
534・49tとなった。

更新した破碎機では従前の機械と同様に廃PCタイヤ等を破碎してタイヤチップを製造する。同社は排出された廃タイヤの中間処理だけでなく、顧客が望む製品としてのタイヤチップを作っていることを念頭に置き、品質

・量ともに安定した供給を行っている。

同社の特色として、さまざまなゴム加工品を処理でき、再資源化しやすい大きさのカット品を製造可能だ。現在、ゴム加工品は1日当たり15tの入荷があり、特にゴムクローラーや免震ゴム、防舷材といった頑丈で処理が困難な製品が多い。遠方の顧客からの処理依頼の問い合わせも増加傾向にある。

同社の昨年度実績では1日当たり約1万本の廃タイヤを受け入れていたが、4月・5月では回収エリア内のカー用品店や自動車ディ



多くの廃タイヤを受け入れる

ラーでのタイヤの履き替え需要が減り、廃タイヤの排出自体が減少していた。さらに、製造するタイヤチップは現在、主な利用先である製紙工場での紙製品の需要減による減産や、新型コロナウイルスの影響による生産調整で燃料の使用量が減っている現状もある。

タイヤチップの新たな利用先の検討は業界全体の課題として対応を行っている。同社は脱石炭に合わせた廃棄物由来燃料の利用促進等に努め、資源循環型社会の推進に貢献していくとした。

専務取締役の弓田大介氏は、「製紙工場をはじめとする再生利用先ではタイヤチップ等を燃料とするボイラー稼働に合わせて発電を行っている工場も多く、各メーカーがその電力を製品製造に充てていることもある。廃棄物を減らしながら環境負荷を低減しているリサイクルチェーンの存在を、メーカーを含む当事者が、より一般消費者等に伝えることで資源循環のさらなる広がりを期待できるのではないかと述べている。